

# 公民権闘争期南部のユダヤ人

シナゴーク・ボミング  
——会堂爆破事件を生み出した背景——

佐藤 唯行

## I 問題の所在と限定

筆者は、これ迄、合衆国南部におけるユダヤ人攻撃の潮流の頂点をなすと考えられるレオ・フランク事件(1913-15)に注目し、同事件を生み出した原因を考案した。<sup>1)</sup>また別の研究では、同事件の中心舞台となったアトランタに地域を限定し、同事件発生以前の反ユダヤ主義の形成過程を検討した。<sup>2)</sup>その結果、世紀転換期の南部においては、反ユダヤ主義形成のメカニズムは、南部社会に固有の黒人問題と密接に連動していた事が判明した。

本稿では、同事件と、それに続く1920年代前半のクー・クラックス・クランの興隆期以後、しばらく鎮静化していた南部の反ユダヤ主義が、再び活発化する公民権闘争期に時期を限定して、当時の南部における反ユダヤ主義形成メカニズムを黒人問題との結びつきの中に探ろうとするものである。その際、筆者が、着目するのは、多様な形態をとった反ユダヤ主義的諸現象の中でも、その暴力的性格の故に、最も世間の注目を集めたユダヤ教会堂爆破という現象である。この現象が、どのような社会的分脈の中で発生し、如何なる反応を地域住民側に惹起せしめたのか、この点について本稿第II節で検討する。「爆破」の頻発化を生み出した背景には、当時の南部で最大の 이슈となっていた公民権闘争をめぐる政治的・思想的対立が存在したと考えられる。そこで、第III節では集団としての南部ユダヤ人が、公民権闘争に対して如何なる立場を占めていたのかという点を検討してゆく。彼等の立場の特殊性を一層明確に照射してゆくためには、北部ユダヤ人の立場との対比という視点が必要となる。この点については第IV節で扱う。

II ユダヤ教会堂爆破事件 シナゴーク・ボミング

公民権闘争期の南部において、黒人の公民権活動家や、その支持者に対して、凄まじいテロ行為が加えられた事は周知の事実である。

ある統計によれば、1954年から65年迄の所謂公民権闘争期の南部において、約227件の黒人教会・黒人住宅に対する爆破事件の発生が確認されている。<sup>3)</sup>

実は、これとほぼ時を同じくして、ユダヤ教諸施設に対する爆破行為が南部各地で頻発していた事実は、一般の合衆国史叙述の分脈の中にも殆ど登場する事はない。

しかし、その頻度は、当時の公民権闘争に関連した爆破事件全体の中でも、無視し難い割合を占めている。一例をあげれば、1954年6月1日から58年10月12日迄の間に、南部全体では83件の爆破(未遂も含む)事件が発生したが、その内の7件(全体の約8.4パーセント)迄が、ユダヤ教諸施設に対するものであった。<sup>4)</sup>この7件(内3件は未遂)は、いずれも人種統合実現にむけての試みの故に、人種の緊張を強くはらんだ都市において発生している。

表1は、公民権闘争期の南部において発生したユダヤ教諸施設爆破(未遂も含む)事件の一覧表である。こうした事件は、類似の事件の誘発を招きかねない危険性を孕んでいるため、必ずしもマスコミで報道されるとは限らない。従って、全ての発生事件の正確な把握は困難である。しかし、表1を通じて、この時期の南部で展開した会堂爆破事件シナゴーク・ボミングについて、おおよその特色を確認することができる。

表1から確認できる特色の第一点は、黒人教会に対する爆破とは異なり、人的被害が極めて少ない点である。多くの場合において、犯行グループは人命を奪い去る意志を持たず、人命の保全に明白な配慮を払っている。爆破時刻をわざわざ人気の無い時間帯に設定している事がその証左となる。

従って、犯行グループの目的は、主にユダヤ教施設に物理的損傷を加えることにより、ある種の威嚇、警告を発する事にあつたといえよう。この点で、同時代の黒人にむけられた凄まじい攻撃とは明らかに次元が異なっていた。<sup>5)</sup>

こうした中で、明らかに人命を狙った稀有な事例としては、表1中の⑫と⑧の事例が挙げられる。1967年12月1日のラビ、ヌスパウムの自宅爆破事件

では、この日、ヌスバウム一家は、たまたま爆破時刻に外出していたため難を逃れている。仮に一家が在宅していたならば、自宅を半壊させたこの爆破により、少なからぬ死傷者を出したものと思われる。<sup>6)</sup>

また1960年3月25日の事件では、まさに礼拝中の会堂が爆破され、堂内にいたユダヤ教信徒の内、二人が負傷している。この時、犯人は、爆破直後に会堂の外へ出てきた別の信徒にむけて、発砲を加え、重傷を負わせている。<sup>7)</sup>

表1から確認できる第二の特色は、爆破されたユダヤ教諸施設の大半は、ユダヤ教の中でも、改革派というセクトに属していた点である。改革派はユダヤ教諸派の中でも、最も世俗的性格が強く、かつ社会・経済的に最も「エリート度の高い」ユダヤ人が集中する教派であった。南部では、元々、改革派以外のユダヤ教セクトは極めて少なく、会衆組織全体の実に約75パーセントが改革派で占められていた。その理由は、南部では、北東部・中西部と異なり、歴史的に労働者層に属するユダヤ人の数が少なく、ユダヤ人住民の多くが、商店主、企業経営者、専門職従事者によって占められてきたからである。<sup>8)</sup>

改革派は、ユダヤ教の他の教派(保守派、正統派)と比較した場合、明らかに、地域社会の諸問題に対して、より、リベラルな立場から積極的に関与してゆく倫理的使命観を歴史的に保持してきた。それ故、ユダヤ教改革派の指導者達は、他の教派の指導者達よりも、人種統合の促進に尽力する積極的姿勢を示す者が多かったといえよう。<sup>9)</sup>

爆破実行者達が、ユダヤ教の中でも、特に改革派の諸施設を狙った理由は、こうした改革派の姿勢にあったといえよう。

また個別の事例に基づいて「爆破された理由」を考えた場合にも、人種問題に対する改革派の基本的姿勢が、一連の爆破事件を誘発した事を示唆する幾つかの証拠が存在する。

今、その全ての事例を指摘する余裕はないが、例えば、表1の①、シャーロット市の Temple Beth El の事例をみてみよう。

この会堂には、公民権闘争の推進に関与したため、地域のクー・クラックス・クランから目の敵にされていたハリー・ゴールデンが所属していた事実が想起されねばならない。

進歩的ジャーナリストとして、全米にその名を知られた彼は、同時に、この会堂の運営にも深く関与していたのである。彼はこの会堂の会衆規約の起

表1 シナゴーク・ホーミング  
合衆南部における会堂爆破事件

梁生日時	梁生場所	会堂名称 (カッカ内は教派名)	犯人	被害	出典
① 1957年11月11日 午前5時45分	ノースカロライナ州 シャーロット	Temple Beth El (改革派)	?	未遂 (6本のダイナ マイトが仕掛け られる)	<i>American Jewish Year Book</i> Vol. 60 (Philadelphia, 1959), pp.44f.
② 1958年2月9日 午前4時45分	ノースカロライナ州 ガストニア	Temple Emanuel (改革派)	?	未遂	<i>Facts: A Periodical Report by ADL</i> Vol. 13. No. 1 (1958), p.111.
③ 1958年3月16日 午前2時30分	フロリダ州 マイアミ	Temple Beth El (正統派)の付属学校	「南部連合地下連盟」 を名乗る人物からの 犯行声明あり	被害額3万ドル	<i>Ibid.</i> , Vol. 13. No. 4(1958), p.132.
④ 1958年3月16日 午後20時07分	テネシー州 ナッシュビル	Jewish Community Center (?)	〃	被害額6,000ドル	<i>Ibid.</i> , p.132; <i>Commentary</i> Vol.25(1958), pp.385-387.
⑤ 1958年4月27日 午前零時頃	フロリダ州 ジャクソンビル	Jewish Community Center (?)	〃	小破, 被害額 不明	<i>Facts: A Periodical Report by ADL</i> Vol. 13. No. 4 (1958), p.133.
⑥ 1958年4月28日 早朝	アラバマ州 バーミングハム	Temple Beth El (保守派)	?	未遂 (外壁に54本の ダイナマイトが 仕掛けられる)	<i>Ibid.</i> , p.134.
⑦ 1958年10月12日 午前3時38分	ジョージア州 アトランタ	Hebrew Benevolent Congregation (改革派)の付属学校	「南部連合地下連盟」 を名乗る人物からの 犯行声明あり	被害額20万ドル と推定	A. Shankman, "A Temple Is Bombed", <i>American Jewish Archives</i> Vol. 23. (1971), pp.125-153.

- ⑧ 1960年3月25日 アラバマ州  
ガスデン  
Temple Beth El  
(改革派)  
ネオナチの構成員で  
ある17歳の白人、  
ハーバード・ジャク  
ソン  
爆破により堂内  
にいた2人の信  
徒が負傷
- ⑨ 1962年1月 テキサス州  
フォートワース  
?  
爆薬携帯中の二人の  
白人少年を会堂付近  
で逮捕  
未遂  
G. Gladstone, "Anti-Jewish Bombing Outrages,"  
Term Paper submitted to Hebrew Union College,  
1971, pp.5f.  
American Jewish Archives, Box No. 518 Folder  
Topic: Anti-Semitism IV
- ⑩ 1962年4月28日 フロリダ州  
マイアミ  
Temple Anshe Emes  
(?)  
爆薬携帯中の白人、  
トナルト・ブランチ  
を会堂付近で逮捕  
未遂  
*Ibid.*, pp.5f.
- ⑪ 1967年9月18日 ミシシッピ州  
ジャクソン  
Temple Beth Israel  
(改革派)  
クー・クラックス・  
クランの構成員3人  
がFBIにより逮捕  
被害額2.5万ド  
ル  
*American Jewish Year Book Vol. 68 (1968)*, p.238.
- ⑫ 1967年11月21日 〃  
上記会堂のラビ、ペ  
リー・マスバウム(改革  
派の主管者)の自宅  
を逮捕  
被害甚大  
家屋半壊  
*American Jewish Year Book Vol. 70 (1969)*, p.75.
- ⑬ 1968年5月27日 ミシシッピ州  
メリダン  
Temple Beth Israel  
(改革派)  
?  
爆破により外壁  
に大きな被害  
*American Jewish Year Book Vol. 68 (1968)*, p.238.

草者であり、長らく事務局長を務め、会堂附属学校で教鞭を取り続けた人物であった。

また表1の④、ナッシュビル市のユダヤ・コミュニティーセンターの事件では、同センター当局が、南部の人種慣行を侵害した事実が、今回のテロを誘発したものと推測される。実際、爆破事件の少し前には、同センターで開催された音楽演奏会に黒人が招待され、更に会衆の「友人」である某黒人が、同センター附属プールの使用を許されていた事実が確認できる。<sup>10)</sup>

次に、爆破事件の具体像を探るために、表1の中から、最も全国的世論の注目を集めた⑦の事件をとりあげて、少し詳しくみることにしよう。1958年10月12日、午前3時38分、アトランタ市北郊の閑静な住宅地、ピーチツリー通りで、未明のしじまを破る爆音が轟いた。Hebrew Benevolent 会衆(通称「 temple」)の会堂が、何者かにより爆破されたのである。

被害総額は20万ドルと推定された。しかし、幸いにも犠牲者は一人も出なかった。

「 temple」はアトランタ最古のユダヤ教会会衆組織であり、地元ユダヤ人社会の中でも、社会・経済的に最も影響力の高い人々が信徒団を形成していた。<sup>11)</sup>この「 temple」のラビを長年にわたり務めてきたのが、ジェイコブ・ロスチャイルドであった。自分の会堂が狙い打ちにされた原因について、「私が余りにも明白に公民権運動と提携してきた事に帰因する。」と彼自身、述懐している。<sup>12)</sup>

当時のアトランタで、公民権活動家として遍く知れわたっていた彼の言動をここで少しふり返ってみよう。彼は1946年に、この町にラビとして赴任してから、僅か2年後に、抑制された語り口によりながらも、黒人差別制度を批判する説教を開始した。それは連邦最高裁の歴史的判決(公立学校での人種隔離の違憲判決)が下される6年も前の事であった。

1948年10月には、「より大きな罪」と題した説教の中で、彼は次の様に自会衆に語りかけている。「……南部を脅かす、目下増大しつつある人種的憎悪に対して、我々は憂慮の念を持ち、黙視する以上のことをなさねばならない。」<sup>13)</sup>「もし品位ある人々が重荷(黒人に課された差別……筆者注……)を取り上げることがなければ、南部は最も原始的な類の偏見と人種的憎悪に逆戻りすることになるだろう。」<sup>14)</sup>

また彼は1954年の連邦最高裁判決を公然と支持している。翌55年に、彼は

アトランタの黒人教育者、宗教家にしてモアハウス大学の学長、ベンジャミン・メイズ博士を自分の「 temple 」の午餐会に招待した。この午餐会の主旨は、「人種統合の道徳的・法的側面」という論題のもとで、黒人の有識者を交えて、討論を試みる事であった。そして、この時、「道徳的側面」について演説を行なう講師として招かれたのが、メイズ博士であった。

これ以後、彼の「 temple 」には数多くの黒人が、講演者或いは聴衆として招待されてゆく。彼の「 temple 」はジョージア州で最初に人種統合の場を形成したユダヤ教会堂といわれている。<sup>15)</sup>

また、彼とマーチン・ルーサー・キング・ジュニアとは長年に及ぶ家族ぐるみの交流を続けた友人同志の間柄であった。そのため、彼は、1964年に、キングがノーベル平和賞を受賞した時、キングの栄誉を称えるための晩餐会を立案した。そして翌65年に、約1500人の招待客をあつめた晩餐会の開催に尽力し、実行委員長を務めた。<sup>16)</sup>

以上の経歴からも判る様に、当時のジョージア州のユダヤ教の霊的指導者の中で、ロスチャイルド程、人種統合を地域に根づかせるために尽力した人物は、他には存在しなかったのである。黒人の公民権を腹藏なく擁護するロスチャイルドは人種隔離主義者達の怨嗟的となり、彼とその妻は、幾度となく不快な脅迫電話に苦しめられたのである。<sup>17)</sup>

ロスチャイルドの「 temple 」を爆破した容疑者として、五人の白人男性が1958年10月17日、大陪審により起訴される。彼等は、いずれも過去に逮捕歴があり、「故意に宗教的礼拝の場所を破壊し、損傷した」咎で起訴された経験の持ち主であった。<sup>18)</sup>

五人の内、四人は、58年3月に設立された反ユダヤ主義的右翼組織、「全国州権党」のジョージア支部に関係・所属していた。同党は、当時、南部、中西部を中心に勢力を持ち、「ユダヤ人根絶」と「連邦政府要職からのユダヤ人追放」を活動目標の一部に掲げていた。<sup>19)</sup>

彼等の内の一人、ジョージ・ブライトは、ラビ・ロスチャイルドに対する憎悪の念を日頃から周囲に開示していた。ブライトは58年5月に、ロスチャイルドがアトランタ市内の黒人教会を訪問し、そこで説教を行なった事を知るや、「あのユダヤ人を絞め殺す」と知人にもらしていた。<sup>20)</sup>

小陪審の構成員達は、これらの容疑者の有罪性を薄々感じとりながらも、決め手に欠く、状況証拠の積みかさねに基づいて、極刑の可能性をもちらむ

有罪評決を下す事は、ついにできなかった。結局、容疑者達は無罪放免とされた。検察側は、彼等を有罪に追い込むに足る十分な証拠を提示できなかったからである。<sup>21)</sup>

当時の南部で、反ユダヤ主義的な破壊行為に走ったブライトの様な人々は、公民権闘争とユダヤ人とのかかわりあいをどの様に認識していたのであろうか。

彼等(反ユダヤ主義的破壊行為の実行者)は、客観的事実にもとづいてではなく、ステレオタイプや妄想にもとづいて行動する事が多かった。非現実的な彼等の思考回路の中では、ユダヤ人、全国黒人地位向上協会、連邦最高裁そして共産主義者、この四つのカテゴリーは相互に互替可能であり、これらが全て一緒になって南部の「雑種化」をめざす陰謀を企てていると考えられていた。<sup>22)</sup>

当時の反ユダヤ主義者が、作成・配布した小冊子類の中には、「人種隔離反対(desegregation)は、白人種を黒人種と雑種化させることにより、白人が、これ迄、この国で占めてきた支配的地位を奪いとうとするユダヤ人側の陰謀である。」というレトリックで満ちあふれていた。<sup>23)</sup>

彼等は、人種差別体制に挑戦するための思想的・哲学的基盤をそなえた若く優秀な黒人知識層の台頭に殆ど気づく事はなかった。それ故、彼等は、黒人自身が社会変革のための運動を組織する能力など持ち合わせているはずがないと考え、公民権運動の背後には、黒人とは違う「別の黒幕」が存在していると考えていた。<sup>24)</sup>

アトランタを始めとする南部諸都市において、1958年以後発生したユダヤ教会堂爆破は、地域住民の側に、どの様な反応を惹き起こしたのだろうか。58年3月のマイアミとナシュビルにおける爆破事件は、それが発生した地域社会に衝撃を与えた。しかし、大方の予想に反して、少なからぬ地域住民達が、ユダヤ人社会への同情と支援を寄せ始めていった。<sup>25)</sup>

自治体当局の対応も大旨、迅速かつ適切なものであった。例えば、事件が発生した都市のひとつ、ジャクソンビルの市長は、最近、同種の事件が発生した、諸都市の行政・警察関係者を一同にあつめた会議の開催を訴えた。

この呼びかけは、直ちに実現し、1958年5月5日、同市には20以上の南部諸都市の代表が集まり、同種の犯罪の再発を阻止するための対策が検討された。<sup>26)</sup>



とりわけ、58年10月12日のアトランタの事件以来、この種の犯罪に対する世論の反発、嫌悪は全国的な広がりを見せる様になった。

この状況について、ラビ、ロスチャイルドは、「……連中(爆破実行者)は、地域社会の反応を読み違えた。……今回の爆破は(地域住民の側に)憤慨の念をひきおこさせてしまったということで、失敗に帰したといえる。」と評している。<sup>27)</sup>

アトランタでは、約40年前に発生したレオ・フランク事件の際には、ユダヤ人攻撃の推進主体は広範な地域住民側から歓呼の声でむかえられた。しかし、1958年の段階では、少なからぬ地域住民達が、反ユダヤ主義的な破壊行為者を強く非難している。既に1950年代末の南部では、過激な反ユダヤ主義的暴力活動は、地域社会の中で広範な社会的支持基盤を持たぬ突出した行動とみなされるようになっていた。

この様に、58年以後に発生した一連のユダヤ教会堂<sup>シナゴグ・ボミング</sup>爆破事件は、ユダヤ人攻撃側が、地域社会の中で、広範な共鳴盤を得られなかったこと、そして地域住民の反応が、宗教施設を爆破されたユダヤ人側に、むしろ同情的であった事を明らかにした。

そして、まさに、その事の故に、ユダヤ教会堂爆破事件は、レオ・フランク事件が生み出した恐怖の残響、「レオ・フランク・シンドローム」<sup>28)</sup>の消滅を告げる役目を皮肉にも担ったといえよう。<sup>29)</sup>

それでは一体、レオ・フランク事件の時期(1913-15年)と異なり、1958年のアトランタにおいて、ユダヤ人攻撃は地域社会の中で、何故、広範な共鳴盤を得られなかったのであろうか。

1958年当時のアトランタは、ニューオルリンズ、マイアミと並んで、南部で、最もコスモポリタ的な性格の都市へと変貌を遂げつつあった。世界中の主要都市との間を結ぶ国際線旅客機が一週間に500便も往き来する当時の同市では、かつてない勢いで、人と物の移動が活発化していった。

人口の流動化の結果、当時の同市では、市住民の中で南部生れの者の占める割合は、北部生れの者の占める割合よりも、既に少なくなっていた。またエスニック構成の点でも同市は多様な姿をみせ始めていた。1958年時の同市は、市人口、約54万人の内、実に13000人近くものユダヤ人を擁し、その他にも、かなりの数の劣格視された白人系マイノリティー集団(レバノン系、ギリシア系等)、そして相当数の黒人中産層社会を有する都市となっていた。<sup>30)</sup>

かって20世紀初めに、市の白人人口の大多数を占めた農民的出自を有するネイティブ白人プロテスタント系住民(その多くは南部バプテスト派の信者で宗教的ファンダメンタリスト)により構成される同質的な地域社会は、58年時のアトランタでは、既に解体・消滅にむかいつつあった。

これにかわって、外来の、教育程度の高い、それ故に人種的・宗教的により寛容な新しいタイプの人々が増大していった事が、レオ・フランク事件の時と大きく異なる地域社会側の反応を生み出した一因となったと考えられる。20世紀中頃のアトランタで生じつつあった上述の変貌は、程度の差こそあれ、ユダヤ教会堂爆破事件が発生したその他の南部主要都市(マイアミ、ナッシュビル、ジャクソビルン等)でも確実に進展していったものと推測できる。

### III 公民権闘争に対する南部ユダヤ人の立場

1950年代末から60年代初頭にかけて実施された世論調査の結果によれば、人種問題に関する南部ユダヤ人の態度は、南部の白人キリスト教徒よりもリベラルではあるが、そのリベラルさは、北部ユダヤ人程、強くはない事が確認されている。

人種問題に対する南部ユダヤ人の、こうしたミドルマン・ポジションは多くの同時代人の証言によっても裏付けることができる。<sup>31)</sup>

同じ南部に住みながら、ユダヤ人が白人キリスト教徒よりも、人種問題に関して、よりリベラルな態度を持ち得た原因は、一体どの様なものであったのか。その理由は、集団としての南部ユダヤ人が、南部の白人キリスト教徒よりも、「リベラルな社会集団」に所属していたからに他ならない。<sup>32)</sup>

即ち、彼等は周囲の隣人よりも、職業的には、マーチャント・クラスの経営者、専門職従事者が多く、経済的にも豊かで都市居住者の割合が高かった。更に、彼等は教育程度が高く、全国的なマスメディアに触れる機会が多い人々であり、同時に外国出身者、北部からの移住者を多く含むコスモポリタンの集団として、南部の伝統的価値観とは異質な価値観を持つ者の比率が高かったといえよう。<sup>33)</sup>

しかし、また社会学者の調査によれば、南部ユダヤ人は、彼等と同程度の教育的・職業的・経済的地位を有する南部の白人キリスト教徒と比べた場合でさえも、明らかに、人種問題に関して、一層リベラルな態度を示していた

事が確認される。<sup>34)</sup>

ユダヤ人が、このような態度をとりえた一因としては、彼等が過去の歴史の中で体験した鮮烈な迫害が指摘できよう。彼等の祖先の迫害体験の記憶が、彼等に黒人達に対する特別な親近感、同情心を抱かせる背景となったと考えられるのである。<sup>35)</sup>

少なからぬユダヤ人達は、黒人達のことを、自分達が、かつて歩まねばならなかったのと同じ道を、今現在、歩みつつあるマイノリティーとみなしていた。<sup>36)</sup>

この様に、人種問題に関して、白人キリスト教徒よりもリベラルな態度を示した南部ユダヤ人達は公民権闘争に対しては、如何なる立場を占めたのであろうか。南部ユダヤ人は黒人と共に戦う勇気ある友人であったのか。

あるいは黒人活動家の敵であったのか。それとも、同情を感じながらも公然と援助の手を差し伸べることができないでいる憶病な友人であったのか。強いて単純化してみると、大方の南部ユダヤ人は、この内の第三番目の立場を占めていたといえよう。

研究者アレン・クラウスは、南部ユダヤ人の約75パーセントが、第三の立場を占めていたと推測している。<sup>37)</sup>

南部ユダヤ人の中には公然たる人種隔離主義者を見出す事は殆ど出来ない。その反面、「共に戦う友人」も少なかった。彼等の大半は、1954年の連邦最高裁判決の正しさを理解し、心情的には人種隔離制度を嫌悪し、黒人に加えられる侮辱に心を痛めていた。そして人種隔離が、みずからの宗教的良心にそむくものであると感じていた。しかし、そうした見解を公式の場で表明しようとする勇気ある南部ユダヤ人は少なかった。また、その様な信念に基づいて行動しようとするユダヤ人は更に少なかった。<sup>38)</sup>

黒人と共に戦う勇気ある南部ユダヤ人とは、実は、南部の伝統に余り染まっていない「第一世代の南部人」である場合が多かった。

その様な人物の代表として、第I節にその名を指摘したハリー・ゴールドンの経歴を挙げる事ができる。

1902年に東欧系ユダヤ人移民の二世として、ニューヨークに生まれた彼は、1930年代の大恐慌のさなか、新聞の求人広告をみて、ノース・カロライナ州、シャーロットに職を求めて住みついた。元々、ジャーナリスト志望の青年であった彼は、1941年に自身が所有する週刊新聞、カロライナ・イブライエリ

ト(全盛期には3万人の定期購読者を有した。)の創刊に漕ぎ着けた。その後、彼は新聞社社長、ベストセラー作家、地元ユダヤ人社会の代弁者として多彩な活動を続ける一方で、公民権闘争への真摯な献身、支援を惜しなかつた。

そのため、既に前節でみてきた様に、彼の所属するユダヤ教会堂は1957年11月に爆破未遂の憂き目にあった。<sup>39)</sup>

ゴールデンの事例に象徴される様に、公民権闘争の推進に積極的に関与し、黒人側からも一定の評価を獲得したこの時期の南部ユダヤ人の大半は、実は北部(カナダを含む)出身者で、自分の代に、初めて南部へ移住した第一世代の南部ユダヤ人であった。

南部のラビの大半が、公民権闘争に対して説教壇上から時おり道徳的支持を与える以上の事をなしえなかつた当時において、表2中の七人は、公民権闘争への真摯な献身ぶりの故に、当時の心ある人々から「勇気あるラビ達」と称えられていた。表2中からうかがえる「勇気あるラビ達」の共通的性格は、第一に北部(カナダを含む)出身者が多いという点である。

表中の二人の南部出身者の内、エメット・フランクは当時の南部大都市の中でも例外的にコスモポリタンの性格の強いニューオーリンズ出身者であった。それ故、典型的な南部出身者といえるのはジュリアン・ファイベルマンのみであった。

共通的性格の第二点は、全員が青年期に北部の高等教育機関に学んでいる事、就中、六人迄が、ユダヤ教改革派のラビ養成機関であるシンシナチに所在するヒプル・ユニオン・カレッジを修了している点である。更に、南部赴任以前の職歴としては四人が、北部のユダヤ教会衆組織で、ラビ補、ラビを務めている。彼等の内、三人が両大戦中に従軍ラビとして海外の戦場に赴き、視野と知見を広める機会に恵まれた事にも注目すべきであろう。

この従軍体験の持つ意味は大きいと思われる。例えば、ジェイコブ・ロスチャイルドの場合、彼が1942年12月以後、ガダルカナル島の戦場において主管したユダヤ教礼拝には、多くのキリスト教徒の兵士が参加したといわれる。戦場という極限状況に置かれた兵士達は、みずからの魂を勇気づけるために、つかの間の静寂の時を得ることに無上の喜びを感じていたのであった。

このような兵士達にとり、自分達がキリスト教徒であり、ユダヤ教徒ではないという事実は、取るに足らない問題にすぎなかつた。彼等は唯ひたすら、祈りの場を求めていたのである。この時の経験の中で、ロスチャイルドは、

より緊急性を帯びた事態に直面した場合、宗教上の相異というものは殆ど意味をなさないということを理屈ではなく、現実体験を通じて理解しえたのである。<sup>40)</sup>

次に、この七人が、公民権闘争に対して、どのような形で具体的に関与したのか、その足跡を簡潔に要約してみよう。(但し、ロスチャイルドについては前節で紹介済みのため、ここでは省略する。)

七人の中で、最もラジカルな存在であったのが、チャールズ・マンチンバンドである。

彼はミシシッピ州ハッティスバーグという南部でも殊の外、白人優越主義が強く、クランが跋扈する閉鎖的コミュニティ(人口5万人中、ユダヤ人口は僅かに175人)の中で、11年間(1951-62年)にも及ぶ公民権闘争において、常に最前線に立ち続けてきた。彼は同地に赴任してまもなく、自分の良心に対して次の誓いを立て、それを守り抜く事になる。

それは肌の色ではなく、その人物の業績と価値に基づいて、人を判断し、決して周囲の偏見に耳を傾けないというものであった。<sup>41)</sup>

彼は人種の平等についてゆるぎない信念の持ち主であった。近隣の黒人大学において、幾度となく行なった演説のため、また自宅に黒人達を招いての、わけへだてのない交流の故に、彼は地元の白人社会から幾多の脅迫を受けたが、それに屈する事はなかった。<sup>42)</sup>

ミシシッピ州、ジャクソンのペリー・ヌスバウムは1961年に同州の監獄に収監中のフリーダム・ライダーズ達への支援さえ行なっている。こうした行為は、彼が抱いている思想を地域社会へ知らしめる結果となり、67年9月と11月に、彼がラビを務めるユダヤ教会堂と自宅は、夫々、爆破の憂き目に会う。この二度に及ぶ爆破事件のいずれにおいても、彼は僥倖により命を長らえることができた。<sup>43)</sup>

1958年のヴァージニア州においては、頑迷な人種隔離主義者で連邦上院議員のハリー・F・バードを指導者とする保守派勢力が、人種統合の実現を阻止するために、「大規模な抵抗」という戦術を展開していた。

この戦術は、黒人生徒が入学登録を行なった公立学校に対しては、その学校そのものを閉校措置にしてしまうことで、人種統合の実現を阻もうとするものであった。

この時、「大規模な抵抗」に対して説教壇上から猛烈な痛罵を浴びせたの

表2 所謂「勇気あるラビ達の経歴」

姓 名	生没年	出身地	学 歴	南部に赴任以前の職歴
Jacob O. Rothschild	1911-1973	ペンシルヴァニア州 ピッツバーグ市	シンシナチ大学卒 ヒブル・ユニオン・カレッジ(以下 HUC と略記)卒 1936年ラビ叙任	1937-42年 ピッツバーグでラビ補 1942-46年 従軍ラビとして南太平洋の戦場を巡る
Charles Mantinband	1895-1974	ニューヨーク市	ニューヨーク市立大学 コロンビア大学修士	刑務所の教戒師
Perry E. Nussbaum	1908-	カナダ トロント市	シンシナチ大学卒 HUC 卒	オーストラリアとマサチューセッツ州で1954年迄ラビを務める
Emmet A. Frank	1926-	ルイジアナ州 ニューオーリンズ市	ヒューストン大学在籍 HUC 卒	?
Malcolm H. Stern	1915-1995	ペンシルヴァニア州 フィラデルフィア市	ペンシルヴァニア大学卒 HUC 卒、1941年ラビ叙任	1941-43年 フィラデルフィアでラビ補 1943-46年 従軍ラビとして海外の戦場を巡る
Ira E. Sanders	1894-1985	ミズーリ州 リッチビル市	シンシナチ大学卒 HUC 卒 コロンビア大学修士	?
Julian B. Feibelman	1897-1980	ミシシッピ州 ジャクソン市	ペンシルヴァニア大学博士号取得 HUC 卒 1926年ラビ叙任	フィラデルフィアでラビ補 第一次大戦中、従軍ラビとして勤務

公民権闘争期南部のユダヤ人

---

ラビとして勤務した南部の会衆

出典

アトランタ, Hebrew Benevolent  
Congregation (改革派)1946-73年

J.R. Blumberg, *As But A Day* (Atlanta, 1967), p.95; ed.  
by. K.M. Olitzky, *Reform Judaism in America* (London,  
1993), pp.176f.

アラバマ州フローレンス市, 1946-52  
年  
ミシシッピ州ハッティスバーグ市  
B'nai Israel (改革派)1952-63年

ed.by. J.R. Marcus, *Concise Dictionary of American  
Jewish Biography* (N.Y., 1993) Vol. 2. p.415.

ミシシッピ州  
ジャクソン市  
Beth Israel (改革派)1954年-

*Ibid.*, p.469.

ヴァージニア州アレクサンドリア市  
Temple Beth El (改革派)

L. Dinnerstein, "Southern Jewry and the Desegregation  
Crisis, 1954-70," *AJHQ* Vol. 62 (1973), p.238.

ヴァージニア州ノフォーク市  
Ohev Sholom Temple (改革派)  
1947-64年

K.M. Olitzky, "A Memorial to Malcolm H. Stern,"  
*American Jewish History* Vol. 82 (1995), p.329; *Encyclope-  
dia Judaica* Vol. 15 (N.Y., 1972), pp.389f.

アーカンソー州リトルロック市  
会衆名不明

J.R. Marcus, *op. cit.*, p.554.

ルイジアナ州ニューオルリンズ  
Temple Sinai (改革派)1936年-?

ed.by. J.R. Marcus, *Concise Dictionary of American  
Jewish Biography* (N.Y., 1993) Vol. 1. p.148; *Encyclopedia  
Judaica* Vol. 6 (N.Y., 1972), p.1205.

---

※尚, 会衆名称と所在地から教派を特定する作業は, ed.by., O.  
Rosen, *Encyclopedia of Jewish Institutions: United States &  
Canada* (Tel Aviv, 1983) に依拠した。

が、同州アレクサンドリアのラビ、エメット・フランクであった。彼は「ユダヤ人は不正義に対して沈黙できない」という題名で演説を行なった。

その演説の中で、彼は「他の神の子等に向けられた偏見に遭遇して、沈黙を守り続けるユダヤ人はユダヤ教の根本原理に対して裏切りをなす者である。」と述べ、自会衆の信徒団に対して、人種統合支持の立場を明らかにするよう訴えかけている。

58年に彼が行なったこの演説は、公民権闘争期を通じて、ユダヤ教のラビが行なった演説の中では、他に類例のない反響を呼ぶものとなった。フランクは、この演説により全国的な注目を集めた。北部の多くの世論は、彼の卒直な姿勢を祝福した。

しかし、彼の発言は、人種隔離支持勢力の反発を招き、58年10月以後、彼が説教を予定していた会場に対しては、爆破を予告する脅迫電話が繰り返えられるようになった。<sup>44)</sup>

また同じヴァージニア州のノフォーク市で、1947年から64年迄、ラビを務めたマルコム・スターンは、1951年という早い時期に、黒人、白人、両人種を共にまじえた宗教礼拝を自分の会堂で開催した。これはノフォークの歴史上、人種統合を実現した最初の礼拝といわれている。<sup>45)</sup>

彼は、その後も、地元白人社会からの反発に憶することなく、一貫して黒人の公民権を説教壇上から擁護し続けた。また58年春には、スターンは、同州内の人種隔離支持勢力の策謀の結果、閉鎖されてしまった公立学校の開校を求めて、レファレンダム(一般投票)を要求するようノフォーク市民に呼びかけている。<sup>46)</sup>

続いてアーカンソー州、リトルロックのラビ、アイラ・サンダースは、1957年に人種隔離を推進する諸法案に反対するため、同州上院に設置された公聴会の場において、毅然たる姿勢で証言を行なった。

ニューオルリンズユダヤ人社会の代弁者の役割を果たしたラビ、ジュリアン・ファイベルマンは1949年という早い時期に、自分のユダヤ教会堂の門戸を黒人達に開放している。この時、ゲスト・スピーカーとして招待されたのが、翌年に、合衆国黒人として、最初のノーベル平和賞受賞者となるラルフ・バンチであった。黒人、白人、両人種からなる2000人の聴衆を集めた49年のこの講演会は、ニューオルリンズの歴史上、人種統合を実現した最初の大規模な会合であったといわれる。<sup>47)</sup>



上に列挙した改革派のラビ達を公民権闘争支援へと駆り立てた原動力は一体どの様なものであったのか、それは恐らく、ユダヤ教改革派の中にとりわけ強く存在した「社会的正義の実現」を希求するリベラルな政治・社会的姿勢であろう。<sup>48)</sup>

特に、第二次大戦以後、人種問題に揺れる南部においては、ユダヤ教改革派に属するラビ達の間で、最も緊急性を要する「社会的正義の実現」とは、人種の平等の実現に他ならなかったのである。<sup>49)</sup>

もちろん、この時期のユダヤ教改革派に属する南部のラビ達が果たした役割を過大視する事は慎しまねばならない。公民権闘争の推進主体を総体として眺めた場合、彼等は飽く迄、人種的平等を求める闘いの方陣の中で、比較的脆弱な一翼にすぎなかったからである。<sup>50)</sup>

#### IV 北部ユダヤ人との対比

前節での検討の結果、先鋭的な一部のラビを除けば、平均的な南部ユダヤ人は、黒人に対しては心の奥底で同情心を抱きながらも、公民権闘争に対しては積極的に支援することに尻込みを続けた所謂「憶病な友人」であった事が判明した。

公民権闘争に対して南部ユダヤ人が示した曖昧ともいえる対応ぶりは、北部ユダヤ人が示した一層明快な反応と対比させることにより、その特性は一層はつきりとする。

次に、この点を明らかにするために、北部ユダヤ人が示した反応を歴史的に辿ってみよう。

北部のユダヤ教ラビ、リチャード・ハーツが1964年に「我々は新参者ではない。我々は公民権を求めるレースの、そもそもの出発点から参加していたのだ。」と豪語した如く、北部ユダヤ人は第二次大戦以前から、公民権を求める黒人たちの戦いの急先鋒を務めてきた。<sup>51)</sup>

公民権闘争の前史を緋けば、北部ユダヤ人社会が古くから黒人たちの戦いの強力な支援者であり続けた事が判る。1909年に設立された最古の黒人公民権団体である全国黒人地位向上協会の理事長職に1914年に就任したのは、ニューヨーク出身のユダヤ人、コロンビア大学名誉教授ジョエル・スピングアンであった。

そして当時、同協会の理事達の中には、ユダヤ教改革派の指導的ラビ、スティーン・ワイズや金融界の大立者、ジェイコブ・シフなど、ユダヤ人社会の錚錚たる指導者が名を連ねていたのである。

また南部農村から北部へ続々と移住を開始した多数の黒人達を支援するために、1911年にニューヨークに創設された史上第二番目に古い歴史を持つ公民権団体、全国都市同盟の創設に際して主要な資金提供者の役割を果たしたのも、実は北部ユダヤ人であった。<sup>52)</sup>

この様に北部ユダヤ人社会が古くから黒人の公民権運動を支援し続けてきた理由はどこにあったのだろうか。原理的に考えれば、合衆国の様な多民族・多民族社会においては、全てのマイノリティーの権利が保障されない限り、個々のマイノリティー集団の立場も決して安泰とはならないからである。<sup>53)</sup>

この点について、全国的ユダヤ人組織であるアメリカ・ユダヤ人会議の理事、ウィル・マスローは、次の様に評している。「他のマイノリティーに対する差別と戦うことなしに、あるマイノリティーに対する差別と戦う事が出来ないという事は真実なのである。ユダヤ人と黒人にとり、提携する事が論理的必然なのだ。彼等(黒人)を援助することが、我々(ユダヤ人)の利害にかなうことなのだ。」<sup>54)</sup>

次に、二集団(ユダヤ人・黒人)間の相互関係という視点に立てば、黒人の敵である白人優越主義者は、同時にユダヤ人にとっても共通の敵であったという歴史的事情が指摘できる。ナシュビル市のユダヤ教改革派のラビ、ウィリアム・シルヴァーマンは「我々は黒人に対する攻撃というものが、ユダヤ人に対する攻撃の紛れもない前兆であるという事を肝に命じておかなければならない。」<sup>55)</sup>といみじくも述べている。

「黒人の敵はユダヤ人の敵でもある。」という基本認識は、南部黒人の指導者側も明確に抱いていた。ミシシッピ州の政治を牛耳ってきた白人の民主党勢力に対抗するために、1964年4月に結成された地方的黒人政党、ミシシッピ自由民主党の創設者のひとり、エアロン・ヘンリーは次の様に述べる。

「我々の陣営には、当然の事ながら、ユダヤ人達が味方してくれていると考える。何故ならば、ユダヤ人の敵は我々が敵対しているのと全く同じ集団であるという事が、通常判明しているからだ。」<sup>56)</sup>

次に1950年代から60年代の公民権闘争の過程で北部ユダヤ人が果たした協力・支援の具体像について確認してみよう。特に重要であったのは進歩的な

ユダヤ人法曹集団による法的助言と支援であった。

1954年の連邦最高裁判決以後、人種統合を実現するために可決された公民権関連諸法の多くは、実は全国的ユダヤ人機関の事務局において、そこに所属するユダヤ人顧問弁護士団の手により草稿が作成され、ユダヤ人議員の手により議会へ提出されたものであった。

更に、公民権に拘わる数百の法廷闘争において、黒人の原告のために弁護士を務めたのも、その多くがユダヤ人弁護士であった。<sup>57)</sup>

また、その割合を正確に特定する事は困難ではあるが、ミシシッピ州の公民権運動の某指導者の推定によれば、1960年代の同州で活動した北部出身の公民権闘争推進派のボランチア弁護士の約9割迄がユダヤ人であったといわれている。この状況について、南部事情に詳しい某ジャーナリストは、「一流どころのロースクールで学んだ最も優秀な若き活動家たちが、アメリカで最後に残された不正義のフロンティアへ乗り込んできた。」と形容している。<sup>58)</sup>

ミシシッピ州の黒人達は彼等を知るようになり、そして信頼するようになった。まもなく、黒人達の間で、「北部出身のユダヤ人弁護士」という言葉は、困難に直面した際に、援助の手を差しのべてくれる同情的かつ現実的な人物を意味するようになった。<sup>59)</sup>

身の危険さえ伴う闘争の現場において、公民権運動を底辺で支えた学生ボランチア活動家の中にも、北部ユダヤ人は、人口比をはるかに上まわる割合で参加していた。

1961年の5月から秋にかけて、州際交通機関における人種統合を実現するために、南部諸州を長距離バスで巡行した所謂「自由のための乗車運動」<sup>フリーダム・ライド</sup>には、多くの白人が北部から参加している。最も低い見積りでも、彼等の内の約3割はユダヤ人で占められていたと推定される。<sup>60)</sup>

また1964年に学生非暴力調整委員会により指導されたミシシッピ州<sup>フリーダム・サマー</sup>夏期自由計画においては、学生層を中心に、約1200人のボランチア活動家が動員されたが、その三分の一から二分の一はユダヤ人であったといわれる。<sup>61)</sup>

彼等は身の危険をも顧みず、地元黒人住民に有権者登録を促し、黒人児童のための教育・啓蒙活動に従事した。彼等の献身ぶりと彼等が支払った犠牲の大きさを文字通り象徴する悲劇的事件が、1964年6月21日、ミシシッピ州、フィラデルフィアの町はずれで発生する。それは三人の公民権活動家、

マイケル・シュワナー、アンドリュー・グッドマン、リチャード・チェイニーの失踪事件であった。三人の内、前二者は共にニューヨーク州出身のユダヤ人であり、チェイニーは地元の黒人活動家であった。

この日、三人は「スピード違反」の咎で逮捕される。留置所から釈放された三人を待ちかまえていたのは地元のクー・クラックス・クランの一団であった。その後、情報提供者の密告により、三人の遺体は8月4日に発見される。容疑者であるクー・クラックス・クランの七人の団員は連邦公民権法違反の咎で1967年10月に有罪とされた。<sup>62)</sup>

犯人達は、自分達が「ミシシッピの生活様式を守るために」三人を殺したと述べている。シュワナーとグッドマンは「黒人びいきのジューボーイ」として殺されたのである。

実際、この惨劇の約1ヶ月前に、地元の黒人教会で、「フリーダム・ミーティング」の開催を黒人住民に呼びかけていたシュワナーを指差し、現場に押し寄せた白人暴徒達は「あの黒人びいきのユダヤ人共産主義野郎をこの土地から追い出せ」と叫んでいる。<sup>63)</sup>

三人の失踪と6週間後の遺体発見は、全米の注目を集め、大きな国際的反響をよんだ。

しかも地元警察が、この殺人に深く関与していた証拠があがると、犠牲者に対する世論の同情はいやがうえでもたかまわっていった。

この国民的同情のたかまりは、1965年の投票権法案通過を導く、ひとつの促進剤となったと言われる。<sup>64)</sup>

以上みてきた様に、公民権闘争の大義を実現するために、闘争の現場で、実際に黒人と共に戦った「勇気あるユダヤ人」の大半は、実は、学生層を中心とする北部出身者であった。それでは、元々、南部を生活の場としていた南部ユダヤ人の大半は、公民権闘争の現場で、何故、積極的役割を果せなかったのだろうか。この点を説明するためには、何よりも、南部ユダヤ人が、南部で占めていた存在形態に着目する事が必要であろう。

ユダヤ人口が住民全体の中で無視し難い比率を占める北部大都市(就中、当時のニューヨークは住民の約四分の一を占めた。)とは異なり、南部のユダヤ人口は全人口の僅か0.5パーセントにすぎない。数的に極めて劣勢な集団であることは、常にその安全を脅かされうる集団であることを意味する。それ故、南部ユダヤ人は、北部ユダヤ人と比べた場合でも、現実の、或いは想像上の

反ユダヤ主義に対して、より一層神経質にならざるを得なかったのである。

とりわけ、大半の南部ユダヤ人は、商店主、専門職従事者として、生活の糧を得るために、顧客である近隣住民の善意に依存せざるを得ない弱い立場に置かれていた。彼等は「不用意な発言」により、自分達の経済的地位が、ボイコットの危険に曝されることを何よりも恐れていたのである。<sup>65)</sup>

そのため、顧客である近隣住民(白人・黒人双方からなる。)が、自分達のことをどう思っているのか、という事について、極度な神経過敏にならざるを得なかったといえよう。

公民権闘争に対して、大方の南部ユダヤ人が示した曖昧とも言える態度は、一方で白人顧客からの圧力、他方で黒人顧客からの圧力、そのふたつの圧力に対して、同時に答えていかざるを得ない彼等の苦悩の選択の結果とみなすことができよう。

注

- 1) 拙稿「合衆国南部ジョージア州におけるユダヤ人攻撃の展開」『一橋研究』70号(1986年) 129-159頁
- 2) 拙稿「アトランタにおけるユダヤ人社会の発展と反ユダヤ主義の形成—1845年から1913年まで」『西洋史学』140号(1986年) 20-37頁
- 3) E. N. Evans, *The Provincials: A Personal History of Jews in the South* (N. Y., 1973), p.320.
- 4) “Anti-semitism in the South the Bombings”, *Facts: A Periodical Report by ADL* Vol.13. No.4 (1958), p.131.
- 5) Letter from Rabbi Newton J. Friedman to Jacob Rothschild, Oct 12, 1958 American Jewish Archives (以下 AJA と略記), Hebrew Benevolent Congregation: Correspondence relating to the Temple's bombing, Microfilm No. 2036.
- 6) N. C. Belth, *Not the Work of a Day: ADL of B'nai B'rith Oral Memoirs* Vol.5 (N. Y., 1987), b-133
- 7) *American Jewish Year Book* (以下 AJYB と略記) Vol.62 (Philadelphia, 1961), pp.106f.
- 8) H. Golden, *Our Southern Landsman* (N. Y., 1974), pp.224f.
- 9) L. Dinnerstein, “Southern Jewry and the Desegregation Crisis,” *American Jewish Historical Quarterly* Vol.62 (1973), p.233.

- 10) J. Toby, "Bombing in Nashville: A Jewish Center at the Desegregation Struggle", *Commentary* Vol.25 (1958), p.387.
- 11) A. Shankman, "A Temple Is Bombed-Atlanta, 1958", *American Jewish Archives* Vol.23 (1971), p.130.
- 12) A. Krause, "Rabbis and Negro Rights in the South, 1954-67", in L. Dinnerstein ed., *Jews in the South* (Baton Rouge, 1973), p.374.
- 13) S. Meisels, "Hebrew Benevolent Congregation of Atlanta, Georgia: A History", Term paper submitted to Hebrew Union College, Winter 1968, p. 18. AJA, Box No.1533
- 14) Jacob M. Rothschild, "The Greater Sin", Oct 13, 1948, p.5 AJA, Rabbi Jacob M. Rothschild's Sermon on Civil Rights, 1948 to 68, Microfilm No.1032.
- 15) J. R. Blumberg, *One Voice: Rabbi Jacob M. Rothschild and the Troubled South* (Macon Ga, 1985), pp.55f; *As But A Day: the First Hundred Years 1867-1967* (Atlanta, 1967), p.109.
- 16) A. Shankman, "Jacob M. Rothschild", in K. Coleman ed., *Dictionary of Georgia Biography* Vol.2 (Athens, 1983), p.855.
- 17) *Ibid.*, pp.854f.
- 18) "3 Grilled in Temple Bombing", *New York Post*, Oct 13, 1958, p.1
- 19) "The Atlanta Bombing Trial", *Facts: A Periodical Report by ADL* Vol.13. No.5 (1959), p.135.
- 20) A. Shankman, "A Temple Is Bombed", pp.144f.
- 21) J. R. Blumberg, "The Bomb that Healed: A Personal Memoir of the Bombing of the Temple in Atlanta, 1958", *American Jewish History* Vol.73 (1983), p.21.
- 22) A. Vorspan, "Dilemma of the Southern Jews", in L. Dinnerstein ed., *Jews in the South*, p.336.
- 23) L. Dinnerstein, "Southern Jewry", p.234.
- 24) M. Friedman, "One Episode in Southern Jewry's Response to Desegregation: An Historical Memoir", *American Jewish Archives* Vol.32 (1981), p.175.
- 25) *AJYB* Vol.60 (Philadelphia, 1959), p.45.
- 26) *Ibid.*, p.45
- 27) A. Krause, "Rabbis and Negro Rights", p.374.
- 28) 1913-15年のアトランタで発生したレオ・フランク事件で頂点に達した反ユダヤ主義への恐怖は、その後、長らく南部ユダヤ人社会の中に蔓延していった。そのため、その後、40年近くにわたり、南部ユダヤ人の中には、黒人の権利を

- 擁護して、ネィティブ白人の不興を買うことを恐れる風潮が一般的となり、公民権問題について公然と論じる勇気を持つ者は殆ど存在しなくなりました。この集団的社会心理現象をレオ・フランク・シンドロームと呼ぶ。M. Stern, "The Role of the Rabbi in the South", in N. M. Kaganoff ed, *Turn to the South : Essays on Southern Jewry* (Charlottesville, 1979), p.30.
- 29) L. Dinnerstein, *Antisemitism in America* (N. Y., 1994), p.190.
- 30) H. Golden, *Our Southern Landsman*, p.76.
- 31) H.N. Rabinowitz, "Nativism, Bigotry, and Anti-Semitism in the South", *American Jewish History* Vol.77 (1988), pp.449f.
- 32) A. Hero, "Southern Jews", in L. Dinnerstein ed., *Jews in the South*, p.217.
- 33) Ibid., p.217.
- 34) Ibid., p.217.
- 35) 拙稿『西洋史学』140号(1986年)35頁
- 36) M. Friedman, "Virginia Jewry in the School Crisis: Anti-semitism and Desegregation", *Commentary* Vol.27 (1959), p.18.
- 37) A. Krause, "Rabbis and Negro Rights", p.362.
- 38) Cf. L. Dinnerstein, "A Neglected Aspect of Southern Jewish History", *American Jewish Historical Quarterly* Vol.61 (1971), p.64.
- 39) M. Speizman, *Jews of Charlotte : A Chronicle with Commentary and Conjecture* (Charlotte, 1978), p.72 ; A. Krause, "Rabbis and Negro Rights", p. 362.
- 40) J. R. Blumberg, *One Voice*, pp.19-21.
- 41) A. Krause, "Rabbis and Negro Rights", p.375.
- 42) R. G. Weisbord, *Bittersweet Encounter : the Afro-American and the American Jews* (Westport, 1970), pp.137f.
- 43) L. Dinnerstein, "Southern Jewry", pp.240f.
- 44) "Integration Crisis: of Bombs and Prayers", *Presbyterian Life Magazine* Nov 15, 1958. p.15 ; "Rabbis Preach on Bombings", *The Washington Post* Oct 25, 1958 AJA, Newspaper Clippings and Rabbi Frank's Sermon on the Desegregation Issue, Microfilm No.563.
- 45) M. Stern, "The Role of the Rabbi in the South", p.30.
- 46) K. M. Olitzky, "A Memorial Tribute to Malcolm H. Stern", *American Jewish History* Vol.82 (1995), p.329; M. Friedman, "Virginia Jewry in the School Crisis", p.22.
- 47) H. M. Sachar, *A History of the Jews in America* (N. Y., 1992), p.802 ; E. N.

- Evans, *The Provincials*, p.314.
- 48) ed. by., J. Fischel, *Jewish American History and Culture : An Encyclopedia* (N. Y., 1992), p.88.
- 49) ed. by., J. R. Marcus, *The American Rabbinate : A Century of Continuity and Change 1883-1983* (Hoboken, 1983), pp.215f.
- 50) J. R. Marcus, *op. cit.*, p.216.
- 51) S. Feldstein, *The Land That I Show You : Three Centuries of Jewish Life in America* (N. Y., 1978), p.495.
- 52) H. M. Sachar, *op. cit.*, p.803.
- 53) J. Fischel, *op. cit.*, p.88.
- 54) S. Feldstein, *op. cit.*, p.495.
- 55) J. Toby, *op. cit.*, p.387.
- 56) S. Feldstein, *op. cit.*, p.497.
- 57) *Ibid.*, p.495 ; H. M. Sachar, *op. cit.*, p.803.
- 58) E. N. Evans, *The Provincials*, p.324.
- 59) *Ibid.*, p.324.
- 60) J. Fischel, *op. cit.*, p.90 ; H. M. Sachar, *op. cit.*, p.803.
- 61) J. Fischel, *op. cit.*, p.90.
- 62) A. Eisenberg, *Eyewitness to American Jewish History Part 4* (N. Y., 1982), p. 193 ; ed. by., M. Newton, *Racial & Religious Violence in America* (N. Y., 1991), pp.466f.
- 63) L. Dinnerstein, *Antisemitism in America*, p.192.
- 64) H. M. Sachar, *op. cit.*, p.804.
- 65) A. Vorspan, "Dilemma of the Southern Jews", p.334.



## Southern Jews During the Civil Rights Struggle Period

Tadayuki Sato

A series of actual and attempted bombings was aimed at Jewish religious institutions in various Southern states between Nov 11, 1957, and May 27, 1968.

Although the perpetrators were not known, Jews attributed the deeds to segregationists.

Many of the most fervent segregationists were also anti-semitic, and associated Jews with racial integration.

As a matter of fact, It was known, too, that Southern Jews privately tended to be more liberal on the race issue than Southern Gentiles.

According to various survey data, Southern Jewish attitudes toward race issue were more liberal than those of Gentile white Southerners but less so than Northern Jew's.

While a few courageous rabbis like Jacob Rothschild of Atlanta spoke out against segragation, most, like their congregants, kept their mouths shut despite whatever reservations they had.

Southern Jewry, comprising less than half of one percent of the population of the South, was largely composed of merchants and professions dependent on the goodwill of their neighbors.

Southern Jew was therefore the man in the middle, subject to pressures from his Gentile white on the one hand, his Black customers on the other.

Most Southern Jews felt that segregation went against the grain of their democratic beliefs and their religious faith.

But there were a few Southern Jews who would articulate this point of view publicly.